

# SPACIAL DIAGRAM: UZU

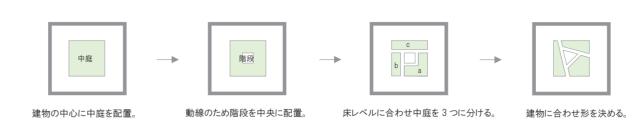
## THEME1. 都心に建つ児童養護施設

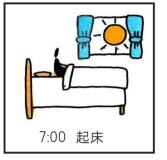
東京都中野区に建つ愛児の家は、都心に建つ児童養護施設であり、アクセスの良さや、生活する 子どもの移動のしやすさがメリットである。しかし、子どもが生活するうえで都心では敷地面積が確保し にくく、愛児の家は約800平方メートルの敷地で、高さが10メートルと定められた土地である。これ らの問題点を踏まえ、狭い土地でものびのびと暮らすことのできる建築計画を行った。



# THEME2. 外部と内部の関係性

沢山の子どもが共に暮らし成長する場となる児童養護施設で暮らす子どもが保護される理由は様々で あり、外部との接触を控えなければならない子どもも生活している。そのため、児童養護施設は人目 が気にならない郊外や閉鎖的な建物になる。そこで、外部に開く窓ではなく内部に開きく窓を設置し、 外部と内部の関係性が入れ替わった内部に開放的な建築計画を行った。



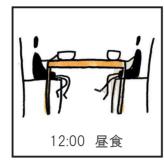








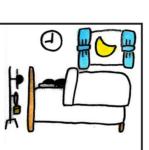


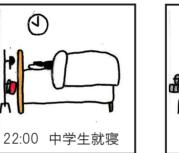














# TIME SCHEDULE: A DAY



17:15 夕食準備

LOCATION

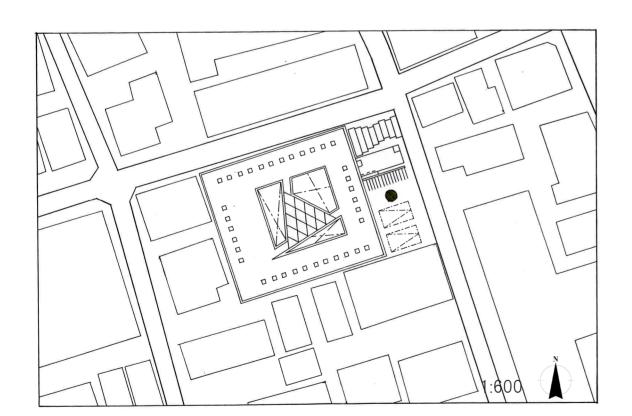




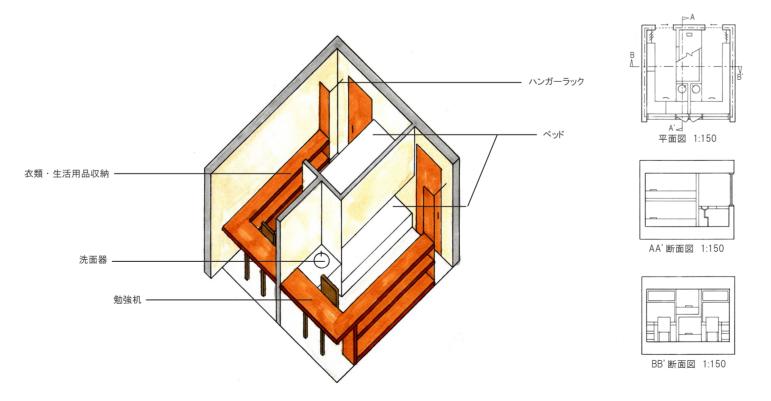




21:00 小学生就寝



# INDIVIDUAL ROOM



## 東京都中野区鷺宮に建つ愛児の家。 最寄り駅から徒歩 3 分のアクセスのしやすい場所に位置する。

周辺には保育園・幼稚園・小学校・中学校、さらに都立高等学校がある。また、 近くには遊具のある公園や、近隣にはスポーツセンターや運動場などの運動でき る大きな施設があり、子どもの成長する場として好立地である。

最上階に位置する個人の部屋は、プライベートのゾーンとなる。敷地が小さく、集団で生活する施設に個人の部屋 をつくるため、最低限の生活ができるベッド・衣類収納・生活用品の収納・机をおよそ 1.7m × 3.5 mの 2 部屋 1 ユニットの個室に配置した。また、顔を洗ったり歯を磨いたり、朝の身支度が自室でできるよう洗面器を設置し、 動線の短縮を図った。机の前には開閉できる窓と採光用の窓を1ユニットに対称的に配置し、全ての部屋にトップ ライトを設け、隣家に面した部屋でも陽の光が入る。

### POINT1.

建物全体が「渦」のように 登っていくスキップフロアに なっている。

### POINT2.

1F から RF へ建物を上るに つれ、プライベートの空間へ と導かれる。

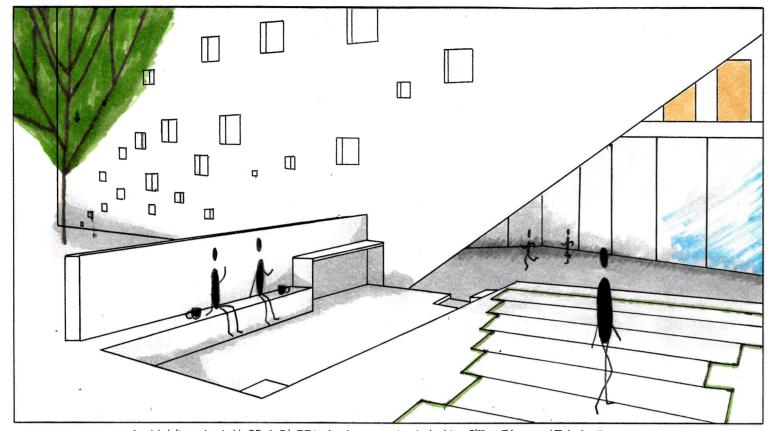
### POINT3.

建物を上るにつれ、3つの レベルの異なる中庭があら われる。

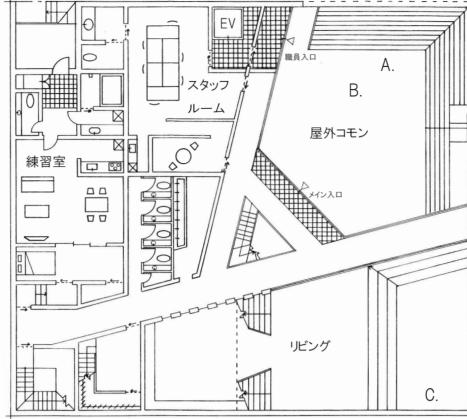
### POINT4.

3 つの中庭をコンクリート・木・ タイルというように素材を変 え、様々な表情を見せる。

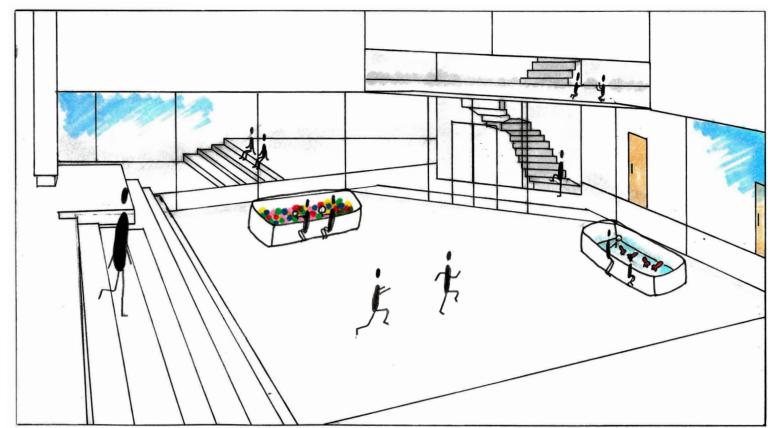
高さ制限の解決策として、建物全体をスキップフロアにし、落ち着く狭い空間と開 放的な広い空間を作り出し無駄な空間をなくすとともに建物全体の床面積が増え るようにした。渦を描くように上へのぼっていくとパブリックゾーンから段々プライベー トゾーンへ導かれる。3 つの中庭も渦のようにそれぞれの階に配置することで様々 なシチュエーションでも外を感じ、開放的な空間となる。



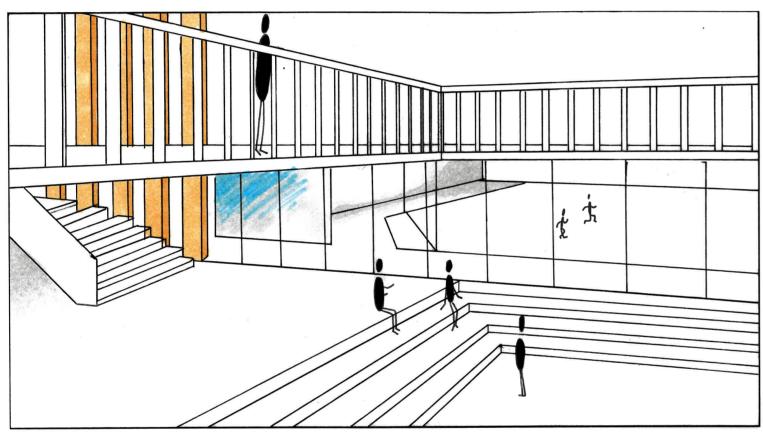
A. 地域の人や施設を訪問した人、イベントなどの際に憩いの場となる。



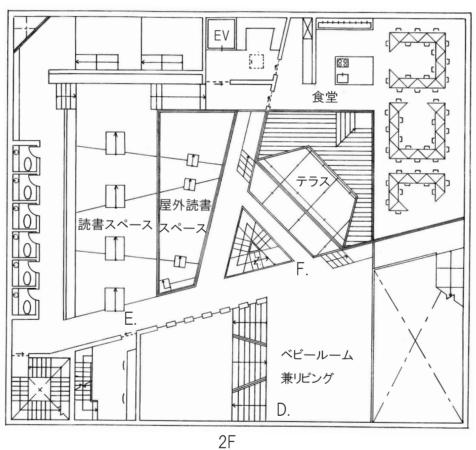
1F

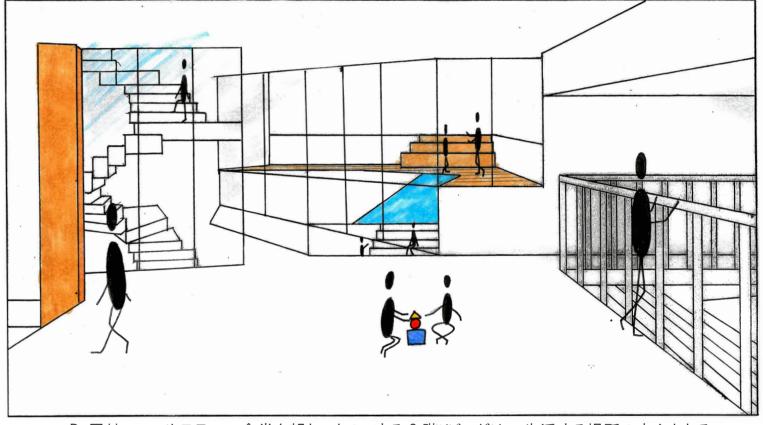


B. 子どもたちの遊ぶ場となる屋外コモンは、社会と施設をつなぐ場となる。

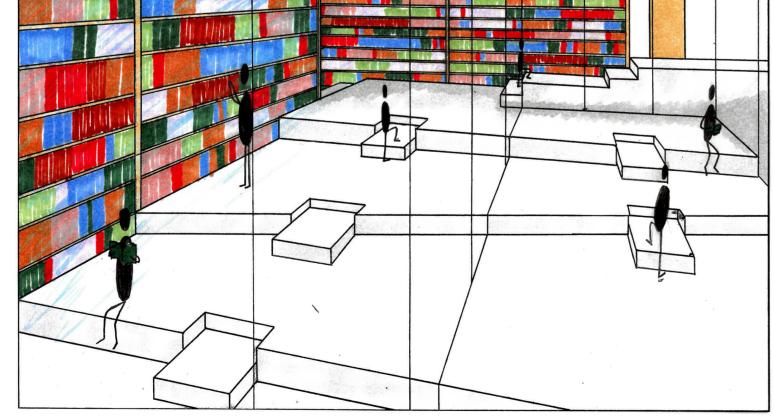


C. 屋外コモン側の壁面がガラスになっているため、外で遊ぶ子どもたちの様子を望むことができる。

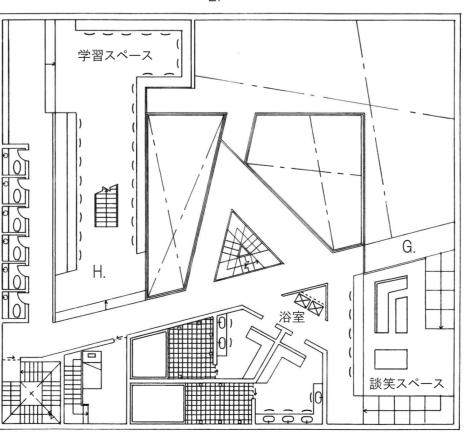




D. 屋外コモンやテラス・食堂を望むことのできる 2 階リビングは、生活する場所の中心となる。



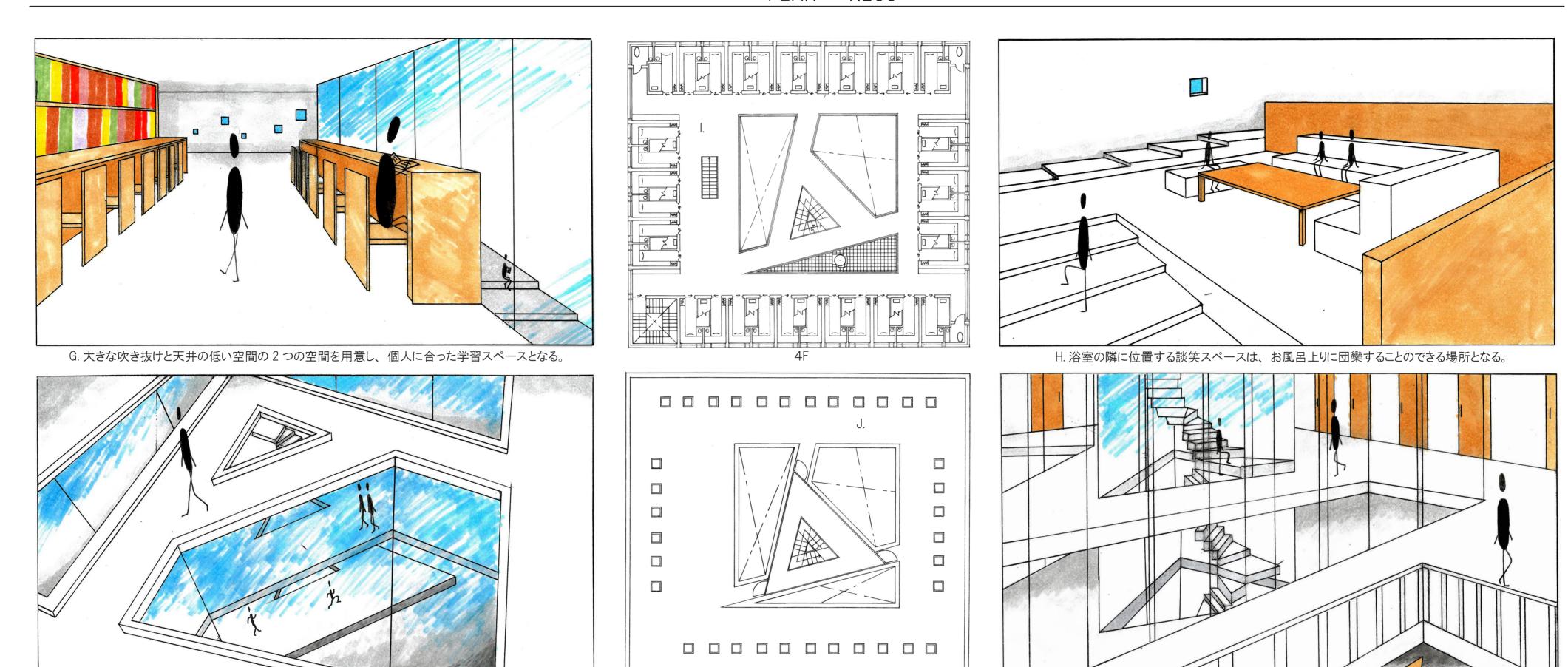
E. 外と内をつなぐ読書スペースは、天気の良い日は外へ、雨の日は雨音を感じながら本を読むことができる。



3F



F. 食堂につながるテラスは、屋外コモンと1階・2階のリビングの様子を望むことができ、会話が広がる。

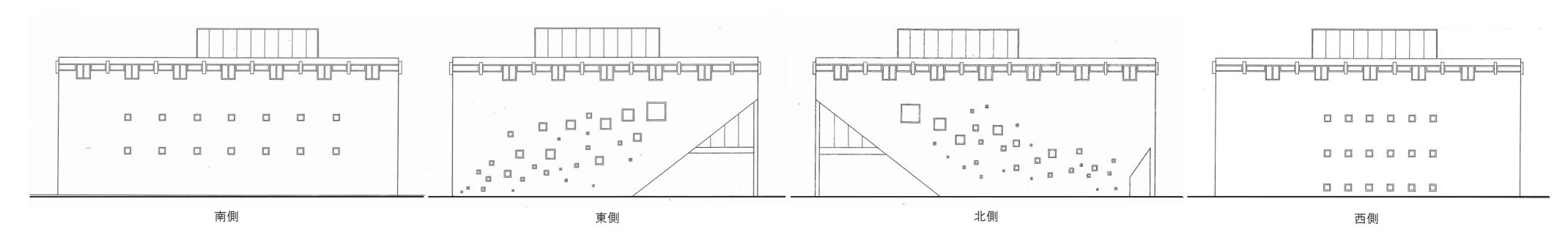


ELEVATION 1:200

J. 最上階の 4 階は個人スペースとなっており、集団で生活しながらもプライベートが守られる。

RF

1. それぞれの用途を持つ3つの中庭と吹き抜けによって、建物の内部全体に陽の光が入る。



児童養護施設で暮らす子どもたちは、両親のいない子どもや引き取り手のいない子どもだけでなく、親や保護者からの児童虐待によって逃れてきた子どもも生活している。そのため外部との接触を控えなければならなく、外に大きく面した開口部をつくりにくい。そこで、下から上にかけてグラデーションのように大きくなる開口部を配置することで、外部からの視線を避けながらも内部に光が差し込む空間となる。また、4階の開口部は、構造部分を外壁と差を出すことで、窓が横に連なり浮いているように見える。

